吉野川市

# 地域の絆（きずな）

## コミュニティーの再生

→27←

美郷地区の住民

## 体験型観光

# 客の手を借り景観保存

昨年末のある晴れた日。柔らかな日差しが注ぐ吉野川市美郷張の梅園で、楽しそうに枝を剪定（せんてい）する人たちがいた。

「この枝も切っていいんですか」

「遠慮せんとどんどん切ってよ。日当たりがよくなってたくさん芽が吹くから」

美郷商工会が企画した体験型観光のモニターツアー。手入れが放棄され、伸び放題だった枝の剪定体験に、県内外の16人が参加した。参加者は、近くの棟本誠二さん(55)ら梅農家3人の指示の下、剪定ばさみで次々と枝を落とした。「思った以上に楽しい。ストレス解消になるね」

商工会が体験型観光を進めるのは、交流人口を増やすのが目的だ。だが、剪定体験にはそれ以上の意味がある。

JA麻植郡美郷事業所によると、美郷地区の梅の生産量は、約30年前には500トン近くあった。「青いダイヤ」と呼ばれ、市場で1キロ600円以上の値を付けた。

「そのころは山一面に梅の花が咲いてね。村中甘い香りがしよった」。花は多くの観光客も呼び、梅は単なる農作物ではなくなったと、棟本さんが教えてくれた。

しかし、10年ほど前から安価な中国産に押され、価格は150～200円と低迷。木の衰弱や農家の高齢化もあり、昨年は43トンにまで落ちた。これとは別に、一部農家が梅干しなど加工品約20トンを作っているものの、全体の生産量はピーク時の8分の1程度だ。

梅園の荒廃で、花見スポットも減ってきている。これ以上観光資源が衰退するのは食い止めたいが、過疎高齢化が進む地域の人たちだけで梅園を守っていくのは難しい。

「だったら、観光客の手を借りようという話になったんよ」と棟本さんが力を込める。農家にとっては負担の大きい作業でも、観光客には新鮮な体験になるはず。住民と客が交流しながら地域の景観を守る。そんな新たな絆を築けないか―。

この構想を環境保全型観光と名付けて企画したのが、昨年末のツアーだった。商工会では、ツアー終了後、参加者に感想を寄せてもらった。「今度は花を見に来るのが楽しみ。実も収穫できたら」「地元の人と交流できるのがいい」

ツアー客の一人として参加した県観光協会の清重泰孝理事長も「ただ観光するだけでなく、地域の役に立つ体験は客にとってもやりがいがある。面白い取り組みだ」と話す。

剪定のほかにも、石積みの修復や山の手入れなど環境保全と観光を組み合わせたメニューはたくさんある。商工会とともに、中心になって活動しているのは住民有志約10人だが、今後はその輪を広げていくのが目標だ。

「多くの人に美郷のよさを知ってもらい、そのうち何人かでも深い付き合いができたら」。棟本さんたちの頭には、そんな新たな絆の形が描かれている。

梅の剪定を体験するツアー客。住民と観光客がともに地域の景観を守る新たな絆づくりに取り組んでいる＝2009年12月、吉野川市美郷張